

〔書評〕

## 「必要」に答えるための研究

―内山大介・辻本侑生著『山口弥一郎のみた東北

―津波研究から危機のフィールド学へ―

山田 巖子

本書は、田中館秀三に地理学を学び、柳田國男に民俗学を学んだ山口弥一郎（一九〇二～二〇〇〇）の研究と実践を、山口の遺した資料群の調査成果から通時的に読み解き、同時代的な意義を浮かび上げようとするものである。山口に関しては民俗学者の川島秀一をはじめ地理学者、社会学者らの論致があるが、本書は民俗学を専攻する内山大介と、地理学を専攻する辻本侑生が協同で執筆することで、地理学と民俗学の両方の視点から山口の仕事を検証し、山口の研究の多面的な相貌を浮かび上がらせることに成功している。また遺された手記や手紙、親交のあった人々の回想など、多彩な資料を活用することで、研究のプロセスや未完に終わったプロジェクト、生活と研究との関わりが跡づけられ、同時代の民俗学の位置や研究の社会的な意義について知ることができる。本書は民俗学を実践した人物の伝記などではなく、民俗学の草創期において「何が民俗学を可能にしたか」という問いに答える一つのモデルケースといえる。小池淳一は民俗学における「学史の不在」を指摘し、「（民俗学そのものの）存在自体への疑問、存立基盤への照射、多元的な発展の可能性」が学史において問われてこなかったことを批判してい

る。<sup>①</sup>しかし本書はそのような課題を克服する「学史」であるといえる。

山口弥一郎という明治三五年に福島県に生まれた人物がなにゆえ民俗学を学び実践することになるのか。民俗学史を捉えていく視座として小池は「外在的、社会的な要請や必要性の主張」<sup>②</sup>を挙げている。津波被災者が高台に移住した後も、もとの集落に戻ってしまうのはなぜか、という問題を考えるために、「民俗学を少しやってみてはどうか」と地理学者から助言を受けたのが、山口が民俗学に向かうきっかけであった。本書では、自身の研究への手がかりや戦後の農村青年の教育のために「必要があつて」民俗学が選り取られた軌跡が示されているといえる。民俗学がどのような目的を作り上げたかという「構想力」、それをどのような人と人とのつながりと場を通して具現化したかという方法としての「かたち」、そして対象やジャンルをどのように作り出していったかその「認識」を歴史に問う<sup>③</sup>という意味で、本書は刺激的な「学史」となっている。

なお、本書のもとになった山口のフィールドノートをはじめとする膨大な資料は福島県磐梯町に寄贈され、福島県立博物館学芸員である内山がその調査整理にあたった。その成果は福島県立博物館のテーマ展「山口弥一郎のみた東北」（二〇二〇年二月八日～四月一二日）にも活かされた。展示では、炭鉱の閉山や津波の被害による離村、ダム水没集落の移転といった、人口の移動に山口が一貫して関心をよせていたこと、高校教員としての教育実践に民俗学が活かされていたこと、会津民俗研究会での後進の育成と交流などが、写真や資料によって目に見える形で示されており、本書のビジュアル版として刊行をのぞみたい。また、資料

の目録や解題などは『山口弥一郎旧蔵資料調査報告書』（福島県立博物館調査報告書第四一集 二〇二〇年三月刊）としてまとめられている。

山口弥一郎は、東北の民俗に心を寄せる人々の間では重要な人物であるが、その名を全国的に有名にしたのは、国文学者の石井正己と民俗学者の川島秀一によって二〇一一年六月に『津波と村』が三弥井書店から再刊されたことによる。

山口弥一郎は昭和八年（一九三三）の津波の後、三陸海岸の集落を調査し、一九四三年に『津波と村』を刊行した。二〇一一年三月一日に東日本大震災が起こり、石井と川島は、この『津波と村』に一九六〇年のチリ沖地震の際に山口が新聞に寄稿した記事を付載して『津波と村』を再刊した。「あとがき」によれば脱稿は五月七日、石井と川島がいかに急いで作業をしたかがうかがえる。それは震災後の津波で被害を受けた漁村への高台移住などの施策をめぐって、山口の研究が今なお有用であると考えたからである。『津波と村』で初めて山口を知った読者にも本書はよき入門書となるだろう。

本書の構成は次の通りである。

#### 序章 本書のねらい

- 一 学問との出会い
- 二 学問研究から現実の問題への対応へ―東北を襲う津波と凶作―
- 三 戦中・戦後の農村で暮らす―「寄寓採録」と「帰郷採録」―
- 四 学校教育と郷土研究

#### 五 文化財の保護と後進の育成

#### 六 大学教育と研究の集大成

#### 終章

執筆分担は、次の通り。序章の1節と3節は内山、2節は辻本、一章は2節のみ辻本、残る1・3・4・5節を内山、終章は内山と辻本が分担で執筆している。二章と六章は辻本が、三章から五章を内山が執筆し、章の最後にコラムが置かれ、内山と辻本が交互に執筆している。

第一章では、明治三五年福島県大沼郡新鶴村（現会津美里町）に農家の長男として生まれた山口が、教職に就き、炭鉱の研究を進める過程で地理学者田中館秀三と、津波の研究を進める過程で柳田國男と知り合い、師事するに至る経緯が描かれる。炭鉱の研究では、山口は人口流動性の高い炭鉱地域の特色を明らかにすると同時に、炭鉱での「生活」を視点に組み込んだ調査研究を進めていたことが記されている。また磐城高等女学校での戦前期の学校教育での民俗学の実践が示される。

第二章では、『津波と村』の調査方法と未刊に終わった『凶作と村』構想を示すことで、山口の広域調査とミクロな調査の組み合わせといった手法と、人口の流出と家の再興に注目する視点の共通性を示した。また、人や集団の移動性への関心から焼き畑の研究を行い、食糧危機に伴う焼き畑を奨励する国策を当初は批判的に見ていたものの、自ら国策と関連した調査を請負い、戦争末期には焼畑の専門家として行政にコミットしつつ、勤務する女学校において焼き畑を指導し、失敗に終わった経緯が示される。

山口の関心の中心が人口の移動現象にあることと、流入者ではなく、もとの住人によって集落が維持される必要性を論じていたことがここで示され、山口の関心の一貫性が示される。また国策への協力とその失敗は、のちの山口の生き方を決定づけたと考えられる。未刊に終わった出版計画と負の経験を描くことで、山口の研究の可能性と限界が示される、本書の白眉ともいえる章である。山口の経験は、「実践的」と評価されて国家的なものに動員されてしまった地方知識人の戦時中の失敗の典型例ともいえる。山口が戦後、「政策への提言」には消極的であったとする「終章」の記述は、山口がこの経験から国家的なものとの距離を取ることを学んだ、ということを示すものであろう。

第三章では、山口が校長との軋轢により岩手県に移住し、教員の傍ら戦中の生活についての調査記録を進めるも、校内では研究への理解が得られず苦しむ経緯が示される。終戦による社会の混乱から会津に帰郷して、自身の生活体験を下敷きにした、戦後の生活課題に答える随想を発表する。それが、昭和二年（一九四七）刊の『農村生活の行方』と昭和二三年刊の『家の問題』の二冊である。ここでは、戦後の新しい時代に農村が生き延びていくための助言を行っている。

第四章では戦後、帰郷した後に奉職した会津高等女学校での社会科教育の実践と女子生徒とのフィールドワーク、農村での青年教育の実践を取り上げている。生徒と行ったダム予定地の奥会津田子倉での生活調査が特筆すべきものとして紹介されている。この調査は組織的な総合調査であり、「水没の前後から将来を見据えた村の変化やそれにもなう人の移動など山口が持ち続けてきた生活課への向き合い方」（一一五頁）

が現れていると評価している。

第五章では昭和二八年（一九五三）に自宅を私設の研究所として開放し、ここでは学問と農村生活の乖離を埋めることと、農村問題の根本的な解決につながる「生活改善」が目指されていたことを明らかにしている。また文化財保護に尽力し、地域学会で共同調査を行い、後進の育成に尽力したことが記されている。

第六章では一九六〇年に地理学で博士号を取得し、大学教員に転身後の研究の展開と東北での研究の集大成を示している。

終章では内山は山口の研究の特徴を「生活の危機へのまなざし」「地域社会への動態的な視点」「現場主義と実践性」の三点にまとめている。一方辻本は、山口が生活者であり当事者であるという複数の立場を持ちながら、それを往還することの強みに自覚的ではなかったこと、柳田民俗学の示す方向性に従順であったこと、現実の社会問題の解決を志向しつつも学術研究の側面に回収されていたことを山口の限界として挙げている。

駆け足で内容を紹介してきたが、山口の研究の中核が人々の移動という現象への興味であり、移動に伴う集落の衰微と復興という関心が一貫してあることが読み取れる。また、戦後は社会科教育や農村の生活改善の提言に民俗学の調査方法や知見を取り入れているものの、あくまで「教育」や「生活改善」が目的であり、民俗学はそれに資するものとして考えられていたように読み取れる。そのように捉えると、辻本がいう「柳田國男の示す方向性への従順さ」という表現には違和感が残る。

第四章では、柳田國男が戦後、社会科教育に意欲を持っていたことを

述べ、山口が女学校で民俗学的な調査方法を取り入れた社会科の「衣服」に関するレポートを出させたという教育実践を紹介している。しかし、山口は「余りに見解が狭過ぎ、独断におちいり易い」ことを不十分な点として挙げ、さらに採集した資料が過去の資料であるため「現在のわれわれの衣装がどんな変化を辿り、どんな見透しにあるかを考えめぐらす能力を養うのには無関係のようにみえ」「社会科の目的は果たされていない」（九九頁）と批判している。杉本仁は山口のこの発言を「民俗学が：引用者註）社会科の全部がまかなわれる位（『民俗学研究所の成立』『民間傳承』一九四七年八月号）に意欲を見せていた柳田の意思を挫く発言<sup>4</sup>」だったとしている。山口にはまず目的意識があり、それに有用な方法として民俗学を受け入れただけであり、民俗学が最終的な目的となることはなかった。柳田の構想を現場から批判して返す力を蓄えた上で、それでもなお、柳田民俗学が当初持っていた「実践性」を評価していたと見るのが正しいのではないか。

山口は民俗学を学んだ理由を問われると「必要があつて」と答えているというが、柳田もまた「必要があつて」民俗学を始めた人であつた。「御断りをする迄も無く自分は学究ではありませぬ。職業の上から申しまして必要以上の学問をする権利を有たぬ者であります<sup>5</sup>」と官僚時代の柳田は『時代ト農政』で記している。同書で柳田は「彼等（新時代になじめない地方の人々：引用者註）の本来に反した思遣りの無い統一政治では永遠に彼等を納得させて新時代に導き出すことが難しからうと思ふ<sup>6</sup>」と述べ、地方の経済上の特殊事情を知り、「彼等」の生活がどのように変遷してきたかを長いタイムスパンで知る必要を説いたのである。

眼前の生活上の問題に答えるために民俗学を志したという意味で、山口は柳田の忠実な「弟子」であつたといえる。

わずかな傷であるが、一章で山口の学問の特徴として「地域の文化を深く掘り起こしながらも一方で中央とのつながりを忘れない山口の研究姿勢」（四二頁）と書かれている点も違和感が残る。民俗学の草創期において、地方の民俗学を志す若者の心を捉えたのは、地方にいながら、郷土研究を通して外部とつながることにあつたといえる（例えば川森博司「中央と地方の入り組んだ関係―地方人から見た柳田民俗学―」岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』二〇〇七年 吉川弘文館）。地方の研究者が中央の研究者のもとを訪れ、中央の研究者が地方の研究者のもとを訪れるという「社交」は、地方の民俗学徒を組織した柳田民俗学にもとから組み込まれていた「方法」でもある。本書では、田中館秀三と山口の関係を、人間同士の信頼関係として描き出すことに成功しているが、柳田と山口の関係は「中央の指導者と地方の弟子」という従来の固定観念に収斂されているように読める。

おぼつかない筆で本書の内容に触れてきた。山口弥一郎同様、本書には多くの問題意識が含まれており、「津波」や「移住」など読者はおのおの、多様な関心に従って読むことで、新たな知見を得られるに違いない。最後に副題の「危機のフィールド学」に触れたい。柳田が民俗学を構想した際には、民衆の日常が危機を内包していることは自明のことであつた。その後の民俗調査において、目の前の話者が戦争や飢え、災害の経験を経たにもかかわらず、民俗学は長いこと「危機に備える」使命を忘れていたといえる。パンデミックや見えない形の貧困が蔓延する



時代を迎えて、民俗学は「どのような目的を作るか」という新たな構想力が求められている。山口弥一郎の軌跡は、過去に民俗学を志した読者には、初発の情熱を思い出させ、新たな構想に向かわせる一助となろう。

## 註

- (1) 小池淳一「共同研究「日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究」の構想・経緯・成果」『国立歴史民俗博物館研究報告』一六五集 二〇一一年
  - (2) 前掲(小池 二〇一一年 三頁)
  - (3) 小池淳一「民俗学史は挑発する」『民俗学的想像力』二〇〇九年 せりか書房 一五頁、重信幸彦「動員と実践のはざまから―バード・ホンブルグの問い」『日本民俗学』二六三号 二〇一〇年八月 一九五頁
  - (4) 杉本仁『柳田国男と学校教育』二〇一一年 梟社 七二頁
  - (5) 柳田国男『時代ト農政』一九一〇年 聚精堂 『柳田國男全集』2巻 一九九七年 筑摩書房 二三五頁
  - (6) 註(5) 二三六頁
- (A5判、二二〇頁、文化書房博文社、二〇二二年二月一〇日発行、本体価格二四〇〇円＋税)

(やまだ・いつこ 弘前大学人文社会科学部教授)